



小学校6年生の奈津子は、生涯の恋におちた。

15年たって、27歳の大人になっただけでも、奈津子は、落ちていく瞬間をおもいだすと、いまでも自分が高い高い塔のうえにいて、羽がふわりふわりと確実ではあるがゆっくりと落下していくように、真下にたたんずんでいる王子のもとまで落ちていく自分を感じるので。

卒業式を間近にひかえる6年生だった奈津子は、自分がこれから中学生になるということ、そうしたら、もう小学校には来ないということ、こうして少しずつ大人になっていくということを、生まれてはじめて身体で理解している時期だった。卒業が近づくにつれて、奈津子のアンテナの感度は高まっていった。いつか、自分も家をでたりするのだろうか。いつか、結婚したりするのだろうか。いつか.....沖縄を離れることがあるのだろうか？

奈津子は、テレビで「東京」をみるたびに、そのあまりの眩しさに小学生のころから憧れを持っていた。いつか東京に行くからね！ と妹にいうと、妹も、おねえちゃん、あたしも東京にいい？ と聞いてきたりした。小学生のあいだずっと、奈津子は「東京」を口にしていた。

けれど、はじめて小学校を卒業することを意識して、自分は本当に大人になり、本当に親から離れ、この沖縄からもでていくかもしれないんだ、とはっきりと自分の未来がみえた途端に、いよいよのない感情に包まれて涙がでそうになっていた。そんな奈津子の複雑な気持ちに、友達は気づかなかったようで、あの日の放課後に、はしゃぎながら奈津子に一冊の漫画をみせてくれた。そのページをひらいた瞬間に、開いてあった教室の窓に、校庭を吹いていた南風がはいてきて、奈津子の頬をやさしくなでたのだ。

奈津子が恋におちた相手は、王子様だった。王子様だったのだ！ それは漫画だろうが実在の人物だろうが、そんなことはどうでもよかった。奈津子にとっての王子様が紙面のなかでいて、それは世の中のほかの人には漫画の人物なのだけれど、奈津子は自分だけが王子と話ができるただ一人の地球人の女の子のように思えてならなかった。

奈津子は、その漫画のストーリーそのものは、どうでもよかった。どんな陰惨な話であろうと、なんだろうと、奈津子の王子は、漫画のなかで王子を演じているだけで、漫画の役を演じていない時間の王子のことを知っているのは、自分だけのように思った。このまま王子を愛していきいこう——そう心にきめた少女は、その日から15年成長したのである。

奈津子は、自分には王子という恋人がいるけれど、王子は紙の世界でしか呼吸できないのは承知のうえだったから、自分はいつまでも、この地球ではひとりぼっちなんだろうか、と中学も終

わるころに思った。奈津子は自分で意識したこともなかったが、まわりが奈津子のことを「美人」といい始めた。それは奈津子が中学から高校にあがるときだった。

大学生になったとき、奈津子は沖縄を離れた。あれほど、実家をでることに対してナイーブになっていた奈津子だったが、東京が奈津子を呼んでいた。大都会のまんなかになんか立ってみて、はじめて自分は「地球のなかでかわいい」という自覚をもった。かわいい、ってなんて力があるんだろう、と嬉しくなった。それに奈津子は、自分の頭の回転がはやい、知的だということも、はじめて意識した。

王子の写真を肌身離さずみにつけるから、たった一度だけ浮気を許してほしい。

奈津子が、紙の王子に頼みこんで浮気をしてしまったのは、東京にでてしばらくたってからだった。そのときの相手は恋というよりも、このまま王子以外との恋愛経験がないまま大人になってしまっただけで、王子にも申し訳がない、恋愛テクニックというものを熟知した大人の女になるには、浮気のひとつふたつ必要だ――と思ったのもあった。奈津子は街を歩けば声をかけられるので相手を選べばいいのだった。

けれど、はじめての地球に住む男性とのキスは、奈津子には、ずっと想像していたような、甘さも辛さもなかった。王子は今も奈津子のことを見守っているというのに、自分だけ何をしているんだろう？ と冷めてしまって、奈津子は初めての地球人のキス相手に、自分には紙のなかに住む王子がいることを告白した。

「ごめん。私には、紙の王子がいるの」

「は？ 誰だよ、そいつ。呼んでこいよ。その加味野って奴、だれだよ」

「ちがうちがう。紙のなかに住んでる王子さま」

「おまえ……」

地球人の浮気相手は、絶世の美男子といわれるほどに美しい男性ではあったけれど、こういった“見解の不一致”はお互いに耐えられるわけがなく、奈津子はこの男性と二度と会わないことを決めた。手帳にも、鞆にも、ポケットにも、あらゆる場所に持って歩いている紙の王子をみつめて、奈津子は涙をこぼして謝った。

「もう二度と地球の男性と浮気しません。私の恋人は王子だけです」

「奈津子さん、王子のご機嫌はいかがでしょうか」

27歳になった奈津子には、結婚3年目の夫がいる。

奈津子は、もう地球人の男性とは二度と浮気をしないとあの日、王子に誓ったのだが、奈津子も予想していないことが起こったのだから人生はわからないのだった。

いまの夫も、紙の王子の崇拝者だった。夫は、同性愛者ではなかったけれど、紙の王子を一目見たときに痺れたそうだ。

「私は、あの日にきめたんです。王子の一番の家来は、この私なんだ」

奈津子の夫は、結婚生活3年目の今でも、力強く語る。そうなのだ。夫は、今、紙の王子さまの筆頭家来、第一執事なのだった。

「奈津子さん。私は執事として、あなたを王子の唯一の恋人であることを生き証人として認めさせていただきます。まさか地球の女性で、紙の世界からでることができない王子を愛しつづける、けなげな女性がいるとは、私も思わなかった」

二人は、出会ってから5年、結婚してから3年たつけれど、今でも常に一緒にいることはない。奈津子の夫は紙の王子の筆頭家来であるけれど、同時に社会人としてかなりのエリート街道をあるいている。あちこち世界中の支店に転勤し、その生活は仕事漬けの毎日だ。一方の奈津子も、インターネットビジネスの世界のなかで、その柔軟な感性と抜群の集中力でつぎつぎに仕事をこなし、いまでは会社の新規部門のリーダーを任されている。

夫婦になったきっかけは、ある日、執事でもある夫が、紙の王子から直々に

「奈津子が地球人の男性と浮気しないように、執事のおまえが俺のかわりに奈津子に尽してやってくれ」

と頼まれたからだった。それを夫が奈津子に告白した日、ちょうど、奈津子も紙の王子と話をしていた直後で、

「おまえは俺の永遠の恋人だが、俺の執事が地球人の女とうつつをぬかさないように、俺の執事に尽してやってくれ」

といわれたのだった。

二人は今も、執事は王子の恋人である奈津子に敬語を使い、奈津子も王子の筆頭弟子である執事の夫に、丁寧語で話す。

お互いに連休がとれた夜などは、奈津子も夫も、部屋中に飾ってある紙の王子に感謝をささげながら、王子に許されているから、と、2人はそっと王子のまえで唇を重ねている。ただ、そのキスは、いつか奈津子が地球人の相手と浮気したときのキスとはちがって、結婚して3年たっても南風のようにやさしく、あまく、とろけるキスなので、奈津子はこっそりと心のどこかで、王子に謝っている。謝っても、謝っても、奈津子は夫とのキスを止めることができない。

(了)